映画音楽を用いた音楽鑑賞指導論
～The Imperial March (Darth Vader's Theme) と Princess Leia's Theme ("Star Wars") による試案～

横坂康彦

Ⅰ 序

A. 動機

私たちがある音楽作品を楽しむ時、そこには少なくとも三つの能力が働いている[1]。まず·作品の土台である基本楽想－主題－を認識できること。次に、主題以外の諸要素－伴奏や対旋律等を認識できること。そして最後に、それらの諸要素がどのように関連して－あるいは無関係に－主題の変化を引き起こしているかを認識できることである。これは専門的な知識や訓練とは関係なく、一般に音楽を楽しむ人なら個人差はあれ、ほとんど無意識に身につけている能力である。その能力が強いほど、音楽作品と享受者との関わりは単なる好き嫌いのレベルを超えて、より多角的になっていく可能性を秘めていることは言うまでもない。

この三つの能力のうち恐らく最も身につけにくいのは第三の能力、つまりその作品全体を通して主題がどう変化しているかに気づく力だろう。学校教育での音楽の授業においても、この点は早くから重視されてきた。

拙文「小学校高学年における映画音楽を用いた鑑賞指導論」[2]でも触れたように、小学校学習指導要領において音楽を愛好する心情を育て、音楽に対する感性を育む上で、「鑑賞」は「表現」活動と共に音楽科の授業内容を構成する重要な領域として位置づけられている。とりわけ高学年の鑑賞教育においては、作品全体を音楽として捉え、種々の曲想を総合的に感じ取る力の育成や、「主な旋律の変化や対照、楽曲全体の構成、音楽を特徴付けている要素と曲想とのかかわりに気を付けて」[3]音楽を鑑賞させる留意点が挙げられている。つまり楽曲の仕組みを理解したり、楽曲を特徴付ける諸要素と曲想とのかかわりを捉える能力が重視され、より具体的には、Ⅰその楽想の中心となる主旋律に親しむこと、Ⅱ主旋律の反復や変化、また対照を感じ取ること、そして、Ⅲ楽曲全体における主旋律とその他の諸要素の関係を把握し、その美しさを総合的に感じ取る力の育成

などが促されているわけである。

だがこういった能力の育成は、義務教育のレベルに限定されるべきことではもちろんない。それどころか生涯教育の観点から非常に興味深い問題であり、積極的にその方法論が模索されるべき領域なのである。新潟大学での音楽専門生の教育以外に敬和学園大学を含めた3校で一般的な音楽の講座を担当し、またNHK文化センターで生涯教育にも携わっている経験から、この思いは筆者のなかでますます強くなっている。

これに関わる最大の問題点は、音楽専門生ではない一般的な立場から音楽作品を楽しむ人々にとって、どのような教材が最も適しているのか、またどのような教材が鑑賞能力を高めていくのかという点である。

学校教育での教科書を繙いてみると、歌曲の旋律を主題とする変奏曲を各変奏における楽器編成の変化に言及しながら鑑賞させるピアノ五重奏曲〈ます〉（シューベルト）や、拍子やリズムの変化が各曲の持つ対照的な雰囲気に直結している組曲〈道化師〉（カバレフスキー）、またベートーヴェンの交響曲第五番〈運命〉を複数の演奏で聴き比べるなど多元的な意味でのコントラストの妙味と共に、一つの基本楽想がどう変化し、変奏されて違った雰囲気を醸しだしていくのかといった点に的を絞った教材も見受けられる。そしてそれらは、純クラシック音楽が主流である。

そこで筆者は、誰でも手軽に親しめて身近なところにある映画音楽を敢えて取り上げ、それを用いることによって、一つの基本楽想がどのように変化して異なった雰囲気や心情を表現する手段となり得るのかを理解するための方法論を模索してみたい。

周知のように映画音楽は、具体的なプロットやストーリーを反映（もしくは象徴）する場合が多く、映画ならではの視覚的効果と相まって鑑賞する側への働きかけがインパクトの強いものとなる。つまり抽象的になりやすいクラシックの器楽曲などに比べ、具体的なシチュエーションの設定や登場人物の喜怒哀楽を通して音楽そのものが特定の感情表現として伝わってきやすいと言えよう。オペラもある意味こういった特性を備えてはいるが、一般の聴衆がライトモティーフ[4]などの概念を理解し、動機展開と物語の進展へと結び付けて鑑賞できるようになるにはかなりの時間がかかる。

B. 題材の設定と目的

そこで筆者が着目したのは、映画音楽の巨匠ジョン·ウィリアムズが作曲した“Star　Wars”において用いられる三つの主題である。周知のようにこの作品は、1977年にジョージ・ルーカスによって生み出されたSFX映画の傑作であり、シリーズ最新作の“The Phantom　Menace”(1999) を含めて4本が世に出されている。

全シリーズの音楽を手掛けたジョン・ウィリアムズは1932年、マンハッタンにほど近いフラッシングに生まれた。ジャズ・ミュージシャンであった父の影響で早くから音楽に関心を持ったが、本格的な訓練はロサンジェルスに移転してピアニスト兼アレンジャーのエプスに師事するようになってからのことである。その後ピアニストを目指してジュリアード音楽院のレヴィン門下で研鑽を積むが、やがてその夢を諦め、より実践的な音楽活動のためにハリウッドへ舞い戻る。初期に書かれた作品は、〈クラリネット・ソナタ〉や〈フルートとピアノのためのソナタ〉など管楽器のための作品が多いが[5]、それは音楽との最初の接点がジャズだったからかもしれない。

1950年代にハリウッドで頭角を現した彼は、後に「屋根の上のヴァイオリン弾き」(1971)、「ポセイドン・アドヴェンチャー」(1972)、「ジョーズ」(1975) などに始まり、「スーパーマン」(1978)、「E・T」(1982)、「推定無罪」(1990)、「ジュラシック・パーク」(1993) などの大作を次々と物にしていく。

とりわけチェンバロを用いた「ファミリー・プロット」は異色の才能を知る絶好の作品である。バロック風な映画にチェンバロを使うことには大した閃きを要さない。だが名監督アルフレッド・ヒッチコックと共演したこの映画で、インチキ霊媒師の予言と人探しが微妙に交錯するミステリーの効果を高めるために、彼はアレンジしたテーマ曲を要所でチェンバロに演奏させている。時に不気味な、また時には涼しく酒落た効果を生み出す不思議な音楽である。大作「JFK」(1991) では、逆に音楽らしい音楽はほとんど出てこない。次々と現れる証人の証言によって綴られたこのドキュメンタリータッチの映画は、その場の物音や心臓の鼓動などがリアルに表現されるが、音楽らしいものといえば主人公の検事や証人が過去を回想する時わずかにバックに流れる程度である。しかしその「わずか」が、ある時は解決への糸口を暗示し、またある時は無力感や敗北感を表す雄弁な語りとなる。

このようにウィリアムズの作品は一作一作が独創的であり、単なる付随音楽を超えた独立した音楽作品としても高い評価を得ている。彼の映画音楽がしばしばコンサートなどで単独に演奏されるのは、音楽作品としての充実度や完成度の高さがあるからだろう。

“Star Wars”のシリーズ全作品においてウィリアムズは、主人公のルークを表す「メイン主題」、そして「王女レイアの主題」「ダース・ベイダーのマーチ」「ヨーダの主題」[6]など映画のキャラクターを表すいくつかのテーマを作曲し、それらをストーリーの文脈に即して変化させてライトモティーフの役割を与え、実に巧みに物語を語らせる。例えばメイン主題の中には、あたかもソナタ形式の第2主題のようなニュアンスで王女レイアの主題も登場し、帝国軍と同盟軍の争いに一見何の脈絡もなく巻き込まれたかのようなルークは、実は同盟軍の中心人物レイアと双子であることがすでに暗示されているのである。　これらの主題にライトモティーフの役割を与える手法は、最初から意図されていた。それは作曲家自身へのインタビューからも明らかである

> 音楽の方はというと……情緒面で馴染みのあるものにしたのです。決して“未知の世界”テラ・インコグニタを表現するのではなく、まさにそれとは正反対の、私たちにとって馴染み深い、覚えのある感情を思い起こさせてくれる音楽です。そのことを私が音楽家として解釈した時、19世紀オペラの表現法と言ってもいいのですが、ワーグナーやその辺りの人たちの表現法を用いることを思いついたのです。[7]

この映画の中心テーマであるフォースを表すフォースの主題は、“Star Wars”（1977）,“The Empire Strikes Back”（1980),“Return of the Jedi”（1983）の3作を通して縦横無尽に現れ、キャラクターの心情や現実に起こる物語の描写、また後に起こる出来事の暗示など、実に多彩な役割を与えられている。ここではフォースの主題を中心とする鑑賞指導論を展開した抽論に続き、ヴェイダーの主題（譜例1）とレイアの主題（譜例2）を素材とした指導論の骨子を提示してみたい。

この骨子は、これら二つの主題が出てくる部分を特別編ホームビデオ版（3作とも1997）に即して逐一考察し、さまざまな場面での授

業に応用できる試案を作成した。なお楽譜は“Star Wars：Suite for Orchestra” by John Williams（Hal Leonard Corporation,©1977 Warner-Tamerlane Publishing Corp.）によった。また主題のまとまりを把握する上で、The Best of Space Music（John Williams & The Boston Pops Orchestra, ©Philips Classical Productions PHCP-10535）のCDを用いている。

II 試案の骨子

前章を受け、ここでは3作すべてを通してヴェイダーとレイアの主題が現れる場面とその音楽的特徴を表にまとめた。それぞれの主題が出てくる場面に対応する巻とカウンター番号（各巻冒頭のプロローグ「遠いむかし、はるか彼方の銀河で…」の開始部をゼロとしている）、そして各場面の説明と主題の特徴が示されている。巻はそれぞれ以下の物語を指す。

Ⅰ…Star Wars
Ⅱ…The Empire Strikes Back
Ⅲ…Return of the Jedi

ヴェイダーの主題

番号	巻	カウンター	状況の説明	フォースの主題
①	Ⅱ	19'24"	●ルークたちのいる同盟軍の秘密基地に帝国軍の艦隊が攻めてくる場面。巨大な帝国軍の指令船の回りを無数のスターデストロイヤーが飛び回り、今にも戦闘が始まる不気味な情景である。	●金管群のトゥッティにより、ヴェイダーの主題が1度通奏される。映画全編を通して初めてこの主題が提示される印象的な場面であり、トランペットとトロンボーンを中心とした力強さや不気味さが直に伝わってくるような音楽である。 ●帝国軍が攻撃の準備をしている情景描写でありながら、同時に"攻め"の心理描写ともなっている。状況に伴って柔軟に変化し、さまざまな心理描写のために姿を変えるフォースの主題と異なり、最初からヴェイダーの特徴が明瞭に表現された音楽である。
②	Ⅱ	22'13"	●帝国軍の攻撃に気づいた同盟軍が秘密基地を閉鎖して脱出を図る。しかし輸送船の手配が整う前に帝国軍の手が延びたため、絶体絶命のピンチに立たされた同盟軍は地上戦を決意する。 ●一方、帝国軍の指令船では提督の過ちによって同盟軍が地上戦への防戦シールドを張ったことにヴェイダーが怒り、その提督を処刑する。その後、新しい提督が任命されるナマナマしい会話のやりとりが続く。	●トランペットとトロンボーンによる強奏でヴェイダー主題の冒頭動機のみが奏される。今度は木管楽器群の対旋律も背景のパーカッションも鋭く、さらに宇宙船の爆音なども伴って一層緊迫した音楽となっている。スクリーン一杯に広がるスターデストロイヤーの飛び交うシーンも緊迫感を増す要因である。 ●しかし帝国軍の指令船内へと場面が切り換わった後は、ゆっくりとテンポを落としたホルンのソロに動機を演奏させながら、音楽は見事に背景へと退く。そして、ヴェイダーと新提督との不気味な会話を浮き立たせるBGMとしての役割に回る。 ●しかし失敗した提督を処刑する場面で動機が突然強奏され、ヴェイダーの怒りの大きさを表現している。
③	Ⅱ	36'29"	●ルークはみんなと別れ、ヨーダにフォースの教えを乞うため惑星ダゴバへと急ぐ。 ●一方、帝国軍に追われるハン・ソロとレイアの一行は、ファルコン号の故障のため高速航行に入ることが出来ず、何とか敵の攻撃をしのいでいる。	●帝国軍の攻撃シーンで再び動機が奏されるが、今度はパーカッションも対旋律も伴わず、指令船の貫禄を示すかのようなマエストーソでトランペットにより演奏される。 ●しかしこの場面では、3連符による特徴的な副主題が動機に続いてすぐに現れ、音楽的な広がりを見せて、追撃されながらも高速航行に入ることのできないファルコン号の微妙な状況を描写し、高まる不安を表現している。
④	Ⅱ	43'56"	●ヴェイダーがマスクを装着している後ろ姿が映し出され、	●新提督がヴェイダーの部屋を訪れる場面で、トロンボーンを中心に

			ふだんは全く人に見せることのない痛んだ後頭部がはっきりと見える。ヴェイダーの正体とは人間なのか、それなら誰なのかと見る者の疑問を煽る場面である。 ●新提督が、ハン・ソロのファルコン号が惑星群の中に逃げ込んだことを報告するが、ヴェイダーは断固としてそれを拒否。どんなことがあってもソロたちを捕まえるよう指示する。	動機のみが1度演奏される。弦楽器による対旋律がつけられているが、今度は場面②での木管楽器群の対旋律とは微妙に異なり、まるで妖怪屋敷に足を踏み入れるような不気味さを演出している。 ●ヴェイダーがマスクを装着し終わり提督へ向き直ると、再びトロンボーンがヴェイダーの威厳を示すようにゆっくりとしたテンポで動機を演奏する。今度は対旋律を伴わないソロである。このカット最後の「言い訳は聞かないぞ!」のセリフの後は、主題を想起させるフラグメントのみがトランペットで静かに奏され、緊張感をいっそう高める。
⑤	Ⅱ	51' 5"	●帝国軍の指令船の中、ファルコン号の徹底捜索を指示したヴェイダーは皇帝の呼び出しを受けて足早に司令塔へと向かう。兵士たちが行き交う様子を交えた動的なシーン。	●ここでは主題がフラグメントに分断され、微妙な対旋律を挟みながら全体が通奏される。金管と木管群両方によって前半と後半に別れての通奏となる。 ●ヴェイダーが皇帝のもとへ向かうシーンでは序奏のリズム動機が効果的に用いられて、ものものしさが演出されている。
⑥	Ⅱ	1# 5'00"	●惑星ダゴバで修行を重ねるルークとR2D2の場面から、帝国軍の指令船へと切り換わるところ。	●ヴェイダーの主題を使って、一瞬にして雰囲気を切り換える。それまでの修行シーンからガラリと変わり、帝国軍の悪の力を音楽の力によって瞬間的に思い出させる効果がある。
⑦	Ⅱ	1# 12'37"	●⑥と同様、ダゴバから指令船に場面が切り換わるところ。 ●行方不明に見えたファルコン号は、実は帝国軍指令船の底にくっついてひたすら息を殺していた。それに気づかず探し回る指令船や宇宙船の飛び交う様子が現れる。	●トロンボーンを中心として冒頭動機が強奏され、一瞬にして場面が切り換わる。 ●敵の宇宙船がファルコン号を探して飛び回るシーンを皮肉るように、金管群によって動機がマエストーソで強奏される
⑧	Ⅱ	1# 35'40"	●帝国軍に捕まったソロがヴェイダーに冷凍付けにされる。愛し合うレイアと別れを惜しむソロは、彼女から引き離されて冷凍装置に入れられる。	●レイアとソロの別れのシーンで弦楽器群による叙情的な終結主題が高らかに演奏される。これはレイアの主題を発展させたものと考えることができる。 ●その後の冷凍シーンではヴェイダーの動機がトランペットとトロンボーンによって無情に奏され、第2巻での悪の勝利を高らかに宣言する。
⑨	Ⅱ	1# 45'29"	●ダゴバでの修行を途中で切り上げたルークは、ヴェイダーとの決戦に挑む。しかし、フォースの使い方が不完全なた	●息詰まるような戦いのバックにトロンボーンによってゆっくりと動機が奏される。ルークはヴェイダーにじりじりと追い詰められてい

			め苦戦する。	くが、その状況が動機の展開で描かれていく。映画全編を通して短いながらも初めてヴェイダー主題の展開が聞かれる部分である。 手に汗握る聴衆の気持ちを煽るような実に効果的な展開である。
⑩	Ⅱ	1# 48'31"	●ルークを追い詰めたヴェイダーは自分こそがルークの父親であることを告白する。そして2人で手を握り、皇帝を倒して悪の帝国を支配しようと説得する。第2巻を通して最も感動的な場面の一つである。	●ヴェイダーの告白と説得の背景に主題が奏される。しかしここでは、スクリーンで展開される衝撃的な内容やヴェイダーの説得の熱意とは裏腹に、音楽はむしろ静かである。主題が前半と後半に別れてそれぞれホルンとクラリネットのソロでゆっくり演奏されるが、弦楽器群の対旋律は今までのどれよりも緊迫した複雑な表情をたたえている。それが、父の告白を聞くルークの複雑な心情（スクリーン上の表情）と重なって見事な効果を上げている。 ●主題を多元的に展開はしないが、用い方によって多彩な表情を作りだすウィリアムズの独壇場である。
⑪	Ⅱ	1# 55'11"	●ルークは父の説得に耳を貸さず鉄塔から手を放して身を投げる。しかし偶然にもダストシュートに嵌まり、うまく抜け出して一命をとりとめ、仲間の宇宙船に救われる。 ●ヴェイダーはルークを取り逃がした悔しさと、自分の説得が功を奏さなかった無力感で指令船に戻る。	●ヴェイダーが指令船に戻る場面で動機が演奏される。ホルンのソロでゆっくりと、フラグメントに解体されそうなぐらいのテンポで淋しげに演奏されるこの動機は、ルークを取り逃がしたヴェイダーの無念さ、説得が不発に終わった空しさ、しかしどうにも抑えようのない息子への愛情を物語っている。表向き堂々と指令船に戻ってくるヴェイダーの背景にこんな形で動機が現れ、そのギャップがますます彼の空しさをクローズアップする。
⑫	Ⅱ	連続	●救出されたルークを乗せて味方の宇宙船が指令船のそばを通り過ぎる。ルークは指令船にヴェイダーの乗っているのをフォースで感じる。 ●その時、「ルーク、(わしと手を組め。)それがお前の運命なのだ！」（カッコは筆者）と、説得を諦めないヴェイダーの声が聞こえる。	●ヴェイダーの声を聞きながらルークは苦痛で顔を歪めるが、その背景に動機がトロンボーンで消え入るように奏される。まるで血縁に訴えながら悪の世界に引きずり込もうとするヴェイダーの呪いでもあるかのようである。
⑬	Ⅲ	1# 22'40"	●帝国軍と同盟軍が最後の決戦を迎えようとしている。ルークは自分が父親を説得し、善の世界に再び呼び戻すことができると信じ、敢えて投降してヴェイダーの懐に飛び込む作戦を実行する。	●第3巻のほぼ4分の3を終わったところで、長い間現れなかったこの動機が使われる。しかしトロンボーンのソロで不完全な動機の形で演奏され、2人の会話の背景に消える。第2巻であれほど堂々としたヴェイダーを演出していた動機が、ここ

			●投降してきたルークを、ヴェイダーは皇帝へ差し出す前に自分で悪の世界へ引きずり込もうとするが、ルークは頑として聞き入れない。一抹の良心が残っているヴェイダーの心に、かつてのジェダイ・ナイト、アナキン・スカイウォーカーに戻れというルークの声が逆に響くようになる。	ではまず暗示として登場することに注目したい。 ●直接関係はないが、ルークがヴェイダーを説得する場面ではフォースの主題のフラグメントも登場し、2人の複雑な関係を暗示する。
⑭	Ⅲ	1# 29'54"	●ルークがヴェイダーによって皇帝の前に連れ出される。両軍の戦いを眺めていた皇帝が椅子を回転させてルークに視線を向け、話し始める。	●トロンボーンのソロによりゆっくりと動機が演奏される。対旋律はほとんどない状態で、動機がくっきりと浮かび上がる。 ●皇帝の威厳でもヴェイダーの堂々たる勢いでもなく、不気味な静けさを描写した面白い使い方である。
⑮	Ⅲ	1# 29'54"	●ヴェイダーは皇帝に殺されそうになるルークに助けを求められて、後ろから皇帝を抱え上げると炉の中に落として殺す。しかし自分もダメージを受けてもう長くないことを悟り、ルークに自分のマスクを取らせる。そして、今までどれほど2人の子どもたち(ルークとレイア)を愛していたかを語る。	●ここでヴェイダーの動機は、ヴァイオリン、トランペットのソロ、フルート、クラリネット、ホルンのソロ、そしてハープというように受け継がれ、極めて美しく演奏される。どの部分でもハープが背景を支え、弱音でゆっくりと演奏される。親子の間に流れる信頼と愛情を確かめるようである。 ●各楽器によって奏される時間はごく短いのだがソノリティーの美しさは比類がない。第3巻においてウィリアムズは、この主題(動機)を悪の帝国や戦闘の象徴としてはただの一度も用いていないことに注目。あくまでも父親としての、また善の心を持っていたかつてのジェダイ・ナイトとしてのヴェイダーを彷彿させる扱いをしている。ここにはキャラクターの変化に伴い、それを音楽でも表現するライトモティーフの手法が遺憾なく発揮されている。

レイアの主題

番号	巻	カウンター	状況の説明	フォースの主題
①	Ⅰ	5'55"	●帝国軍の反乱に対し、宇宙の秩序を保つため、ジェダイ・ナイトに助けを求める王女レイアの宇宙船が出発した。だが途中で帝国軍の艦隊ヴェイダーに捕らえられる。	●ヴェイダーの兵士たちが宇宙船に踏み込む慌ただしいシーンの中で、フルートによるレイアの美しい主題が一瞬演奏される。わずかにタイミングをずらしてレイアが画面に現れ、すぐに捕縛される。レイアの存在を象徴するライトモティーフとしての使用が明らかな部分である。
②	Ⅰ	29'55"	●かつてのジェダイ・ナイト、オビワン・ケノービの家に連れて行かれたルークは、そこでオビワンに向けられた救出のメッセージを見せられる。それは①の直前にレイアがR2D2に記憶させたもので、映像には彼女自身が出てきて直接オビワンに事の重大さを訴える。	●メッセージの映像にレイアが出てくる時、そのバックにフルートでこの主題が演奏される。①のニュアンスと全く変わらず原形のまま演奏される。
③	Ⅱ	5'26"	●ソロは同盟軍と別れて帰るためレイアに挨拶をしに行く。しかし、彼女への愛を素直に伝えられず口論となる。	●レイアの主題が初めはフルートで、後に弦楽器に移って短い展開を伴いながら演奏される。 ●2人が口論しながら秘密基地の廊下を足早に通りすぎて行くバックに、ゆったりとしたテンポで静かにこの叙情的な主題が展開される様は実に美しい。2人の口論が喧嘩ではなく、互いに愛情をストレートに表現できないだけであることを暗示するような面白い使い方である。
④	Ⅱ	50'36"	●ファルコン号の修理をしているソロとレイアは互いに愛の告白をし、接吻する。	●主題の原形は出てこない。しかし、明らかに主題から派生したと思われるメロディーが最初はホルンで、次に弦楽器群で演奏される。叙情的な主題の性格が生かされた部分である。
⑤	Ⅱ	1#25'25"	●ランドー・カルネシアン男爵の惑星に逃れているソロとレイアは、これから先について語り合っている。2人はすでに恋人同志である。	●初めはチェロで、後にクラリネットによって④で演奏された楽想が現れる。先行き不安ながらも2人の関係は甘く、強い信頼で結ばれていることを表しているようである。
⑥	Ⅱ	1#42'18"	●冷凍付にされたソロを運搬する兵士を追い、レイアは銃で攻撃をしかける。だが宇宙船はソロを乗せて飛び立ってしまう。	●④で演奏された楽想がここでは弦楽器によって現れる。動的なリズムを伴い軽快なテンポで戦闘の様子を描く。ランドーに裏切られ、ソロと引き離されたレイアの焦りを象徴するようである。またレイ

				アの勇敢さが描かれる部分でもある。
⑦	Ⅲ	19'40"	●レイアが賞金稼ぎに化けてジャバ・ザ・ハットの城に行き、冷凍付にされたソロを助ける。目の見えないソロもレイアの存在に気づき、接吻を交わす。	●④の楽想がフルートによって演奏される。ハープをバックに一層の温かさを増した音楽となる。レイアの存在を示すと同時に2人の愛を音楽でも確認するような趣がある。
⑧	Ⅲ	47'38"	●オビワン・ケノービの霊がルークに、彼の実の妹がレイアであることを告白する。皇帝から守るためにルークとレイアは双子で生まれた後すぐに離して育てられたことも告げる。	●チェロによりレイアの主題のフラグメントが演奏される。このシーンにはいないレイアの存在を、音楽が思い起こさせる仕掛けである。
⑨	Ⅲ	2# 3'20"	●レイアはソロに、ルークが自分の兄であることを告げる。そしてソロとは改めて恋人同志の絆の強さを確かめる。	●④の楽想が現れて、2人の会話を温かく包み込む。叙情的な主題は実に美しく、また弦楽器による広がりを持って演奏される。 ●第1巻で出てきたレイアの主題は、第2、第3巻ではそこから派生した別の楽想となって用いられる。しかし性格はあくまでもレイア主題の叙情性を保っているところが面白い。フォースの主題やヴェイダーの主題ほど変化しないが、動的な主題群の多い中でしっとりとした叙情性を保つ独自な音楽である。

Ⅲ　試案と応用

フォースの主題を扱った拙論で述べたように、フォースの主題は3作を通して最も頻繁に現れ、物語の要所を表現する重要な役割を与えられていた。ウィリアムズはこの主題に決定的な重要性を与え、他の主題に比べてはるかに優位に、また柔軟に用いている。

それに対しヴェイダーの主題は、ヴェイダーと帝国軍を象徴する音楽として用いられていると同時に、ストーリー展開においてヴェイダーのキャラクターの変化を描くライトモティーフとしての役割が明らかに強い。それはこの主題が、帝国軍の力を誇示する第2巻で初めて登場し、主題の原形もしくは非常に特徴的な冒頭動機が金管群によって頻出することからわかる。そして第3巻に入り、帝国軍の総帥としてのヴェイダーよりもルークの父アナキンとしてのキャラクターが重視され始めると、動機が原形で使われる回数が減って3回中1回（骨子「ヴェイダーの主題」の⑭）となり、他は動機のフラグメント、またはさまざまな楽器の受け渡しによる主題展開という形をとることからもわかる。しかしこの1回は、ヴェィダーではなく帝国軍の皇帝にからめて用いられる場面である。

このヴェイダーの主題に対し、レイアの主題は一貫して抒情的な性格を崩さず、ソナタ形式における第2主題ようなの性格を堅持している。だが、レイアがハン・ソロと恋人同志になってからは主題の原形は用いられず、主題から派生した別の楽想が最後に至るまで用いられ、2人の関係の発展を暗示しているのである（骨子「レイアの主題」の④以降）。そして第3巻においても、動機が原形で出てくるのは、オビワンとルークの会話の中でレイアがルークの妹であることが告げられた時、そこにはいない彼女の存在を想起させる意味で用いられている（骨子「レイアの主題」の⑧）。となれば、ウィリアムズは主題の原形と派生楽想を意図的に使い分けていると考えて何ら差し支えないことになる。

フォースの主題、そしてこれまでに指摘してきたヴェイダーの主題とレイアの主題を教材として、授業者はイマジネーションを広げいくつもの指導案を作ることができる。以下の試案はあくまでも基本サンプルに過きず、授業者においては骨子に基づくヴァリエーションを自由に作っていただきたい。

試案1

これは、第2、第3巻において、ヴェイダーのキャラクターの移り変わりに伴って変化するライトモティーフとしての主題（動機）の面白さを味わう案である。

1. まず大まかにストーリーを説明し、CDを用いてヴェイダーの主題の原形を聴かせる。
2. 次に、金管によって独奏されたり、一風変わった調性のひねりが採り入れられていたり、不気味な中間部を持つこの主題の音楽的な特徴と独創性を説明する。
3. 骨子①を用い、この主題がどのようにしてヴェイダーや帝国軍を描いているかを説明する。
4. 骨子⑨を用い、戦闘シーンにおける動機の展開を味わってみる。まず主題がどう展開されたのか、どのように変形されているのか、その結果、原形と比べてどのようになったのかを説明し、次にそれがストーリーの展開を描く上でどんな役割を担っているかについて、このシーンを見ながら一緒に考える。当然ここでは学習者の自由な反応を拾い、ストーリーと主題展開についてそれぞれの感じ方をディスカッションすることが効果的である。
5. 骨子⑩を用いてさらにその方向性を追う。ここではヴェイダーの主題は前半と後半に別れ、編成も変えてゆっくり演奏されるが、この「ゆっくり」が主題の変化を考える大きな鍵となる。骨子⑩の代わりに⑫を使うと、主題の変化の落差をもっと大きくすることができる。
6. 骨子⑮を用いて、キャラクターの変化を描くライトモティーフとしてのこの主題の重要性、そして独創性を認識する。

試案2

次は、主題とそれ以外の諸要素がどう絡み合ってそれぞれのシーンにふさわしい音楽を形成しているかを認識させる試案である。

試案1と同じくⅡとⅢを採り上げ、試案1のステップ１と2を行う。次にCDに戻り、この主題にはどんな対旋律が付けられているのかを説明して再び鑑賞させる。その対旋律があることによって主題にどんな性格が与えられるのかを説明し、骨子③を用いて対旋律のある場合とない場合の違いを認識させる。また、骨子①と②の対旋律を比較することによって、主題以外の諸要素が主題に与える影響を比

べる。さらにそれらを骨子⑤や骨子⑥と比べることによって、主題がもともと持っていた表情と全く遠った色合いを味わってみる。学習者からそれぞれの感じ方の違いを引き出し、対旋律が持つ音楽上の大きな役割について気づかせる。

試案3

レイアの主題を用いた試案としては、他の主題にない抒情性を生かし、フォースの主題やヴェイダーの主題との対比を楽しむことができる。レイアの主題は、他の二つと違って変化することはほとんどない。その代わり、レイアとソロが恋人同志に発展すると、派生楽想が現れて主題は消えてしまい、2人の関係の発展を暗示している。その点に着目し、他の主題にないライトモティーフのあり方を認識することができる。しかもレイアの主題は、そこにいない本人を想起させる場面で2度使われるが（「レイアの主題」骨子②と⑧)、これはヴェィダーの主題では1度も行われたことのない処理である。レイアの主題は穏やかで抒情的でありながら、そこにいないキャラクター自体を一瞬にして想起させる独自な手応えであることを認識させる。

試案4

ここでは、上記三つの主題の対比を試みる。その時々のシーンに即してどのようにでも変化するフォースの主題は、原形があってないような実に不思議な音楽である。全3作を通して24箇所に現れ、その度に形を変えると言っても過言ではない。それに反し、ヴェイダーの主題は明らかにヴェイダーや帝国軍の性格を物語っているし、レイアの主題も一貫した性格を帯びている。これらを組み合わせることによってライトモティーフの多様性、対旋律を用いた主要主題の膨らませ方など、さまざまな角度から授業を展開していくことが可能である。

注

1…もちろんここでは単純な意味での作品の享受であって、心理学的な側面は一切考慮していない。

2…新潟大学教育人間科学部紀要第4巻第1号（2001年11月）。

3…文部科学省『小学校学習指導要領解説・音楽編』教育芸術社1999年、68頁。

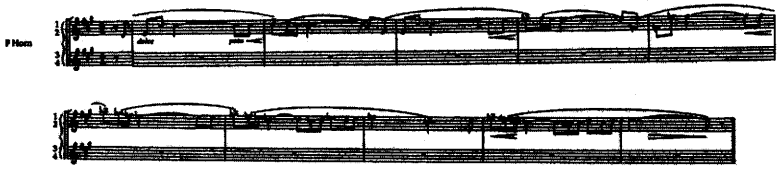
4…「示導動機」と訳され、特定の動機が人物や事象や想念などを象徴し、繰り返し用いられることによって作品全体の進展や統一を促す楽想のことである。

5…映画音楽も含めた作品一覧は、神尾保行『スター・ウォーズを鳴らした巨匠：ジョン・ウィリアムズ』音楽之友社（2000年）を参照されたい。

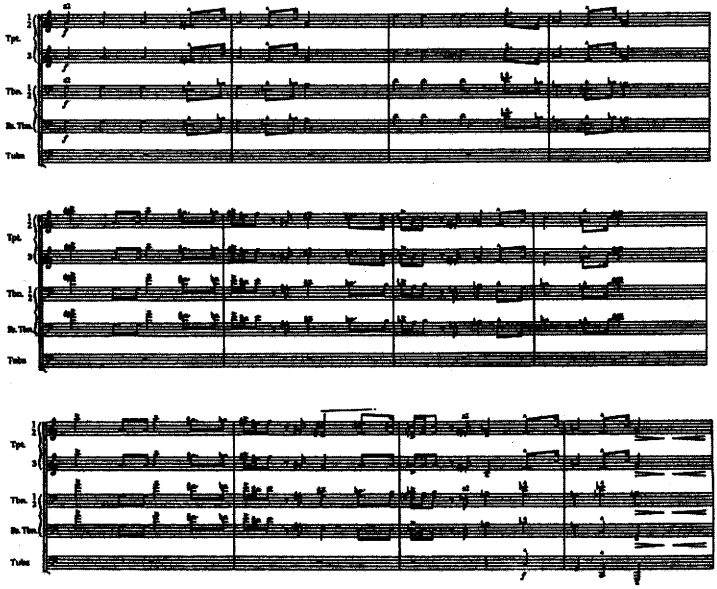
6…主題の割り出しは、主にCD "The Best of Space Music"（John Williams & The Boston Pops Orchestra, Philips PHCP－10535）によった。

7…神尾保行『スター・ウォーズを鳴らした巨匠：ジョン・ウィリアムズ』78頁。

譜例1


F Horn

譜例2


Tpt.
Tbn.
Bs. Tbn.
Tuba
Tpt.
Tbn.
Bs. Tbn.
Tuba
Tpt.
Tbn.
Bs. Tbn.
Tuba